

飛鳥中学校

学校だより

# 主人公

No. 3

2019.4. 24

発行  
的場 宏純

## できないことができるようになる わからないことがわかるようになる

そんな飛鳥中学校を創っていきましょう

先日、NHKの朝の連続ドラマ「なつぞら」を見ていました。主人公の奥原なつは、農業高校3年生のときに、おじいちゃんの牧場の牛の出産にたちあいます。必死で子牛が生まれるのを助け、そして仮死状態の子牛に人工呼吸をして、子牛がその一命を取りとめた、そのすぐあと子牛は必死で立ち上がる場面がありました。

私たちの多くは、こんなふうに牛や馬、そして奈良公園の鹿も生まれてすぐにその足で立ち上がり、歩き回れることを知っています。以前に「それはなぜですか？」と当時の中学生に授業で問いかけたことがあります。返ってきた答えは一様に「そうしないと敵に襲われる」「自分の身を自分で守るため」でした。まさにそれは正解だと思います。



では、逆に私たちヒトはどうでしょうか、生まれてすぐに立ち上がれるでしょうか。ヒトの赤ちゃんは、平均して生まれておおよそ1年後にようやく自分で歩くことができるようになります。このことについてスイスの動物学者であるアドルフ・ポルドマンは「人間は生理的早産である」と位置づけました。つまり私たちヒトは動物学的には、本当は母胎でおおよそ21ヶ月間育ててから生まれる必要があるそうです。しかしその発達した脳を守り、安全に出産するために、それよりも約1年も早い、おおよそ10ヶ月で生まれてくるようになっている。だから残りおおよそ1年後にようやく歩くことができると考えました。

馬や牛、鹿などほ乳類の多くがそんなふうに、母胎のなかでほぼ完成された状態で生まれるのに対して、私たちヒトは、そのほとんどを未完成なままで生まれてきているわけです。そして、このことが私たちヒトにとっては、その生き方を決定的にする、とても大きな出来事なのです。私たちはヒトとして生まれただけで、人間として生きられるわけではないということです。未完成な私たちは、それからの日々のなかで、ひとつひとつ力を身につけながら、人間へと成長しているのです。

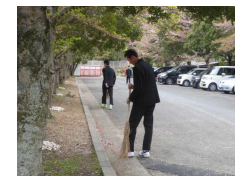
私たちは、だれもが「できない。」「できなかった。」ところからスタートしていることを、私たち自身がいつの間にか忘れてしまっていることはないでしょうか。人は「できない」ことがもともと当たり前なのだ気づいているのでしょうか。今、自分が何かをできないことにしょげかえってしまったり、うつむいてしまったり、元気をなくしてしまっている人はいませんか。また、人のできないことを見つけては、口撃してしまっている人はいませんか。

学校とはまさに、「できないことをできるようになる場所」であり、「わからないことがわかるようになる場所」です。はじめは誰もが「できなくて当たり前」「わからなくて当たり前」「この先できるようになればいい」「この先わかるようになればいい」のです。赤ちゃんが必死で何度でも立ち上がるように、自分が間違えることを恐れず、人が間違っても笑わず、皆でお互いを大切にしながら、時には自分の力を存分に人に貸してあげながら、人からは遠慮無く力を借りながら、それぞれがおもいきり伸びていける飛鳥中学校にしていきましょう。1年生は3年間で、2年生はあと2年、そして3年生はあと1年後には、「これだけのことができるようになった。わかるようになった。」と胸をはれるように、進んでいきましょう。



### 生徒会本部役員が 始めてくれました

生徒会本部役員の人たちが先週、散ってしまった桜の花びらを一生懸命にはき集めてくれました。誰かに指示された活動ではなく、自分たちで「何かやりたい。」と始めてくれた取り組みです。その日のお昼には全校にも呼びかけをしてくれました。飛鳥中学校にも、生徒会本部役員を中心とした自治の力がしっかりと育っていることを実感しました。この自治の力を、これからもぐんぐん育てていって欲しいです。



### 書道部の作品が新しく メッセージをくれています

いつも、正門や校舎内に様々なメッセージを掲げてくれたり、行事の時にはその力を全校生のために発揮してくれている書道部が、新しく正門前にみんなへのメッセージを掲示してくれました。

### 『自分を信じて 夢を信じ続けて』

